

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520252

研究課題名（和文） アメリカ文学における人種とジェンダー越境表象の研究

研究課題名（英文） A Study of Representations of Race and Gender in American Literature

研究代表者

杉山 直子 (SUGIYAMA NAKO)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：20213506

研究成果の概要（和文）：

中国系アメリカ人女性作家マキシーン・ホン・キングストンや黒人女性作家デインジー・セナなど、米国のマイノリティ女性作家の作品における「パッシング」の表象について研究し、「パッシング」がジェンダー化された暴力と平和の問題、および「アメリカ人」というアイデンティティそのものの問題と複雑に関係していること、従って人種およびジェンダー越境がさらに追及すべきアメリカ研究の重要なテーマであるという認識を得た。

研究成果の概要（英文）：

By analyzing novels by American minority women such as Maxine Hong Kingston and Danzy Senna, I found that gender transgression leads us to reconsider the relationship of gender and peace/violence duality and race passing to reconsider the construction of “American” identity itself, and that therefore gender and race transgression is the important theme to be explored further.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：人種、ジェンダー、越境、パッシング、女性作家、マキシーン・ホン・キングストン、デインジー・セナ

1. 研究開始当初の背景

アイデンティティ越境については、人種に関しては黒人と白人の関係をめぐって、黒人による白人へのなりすまし（「パッシング」）、および、白人による黒人へのなりすまし（これは芸能人の「ブラックフェイス」という形をとることが多い）については、多くの先行研究が存在した。黒人による「パッシング」

に関する文献には近年、特に文学を扱ったものや現実の社会現象について研究したものなどが多数存在し、また白人の側からの黒人への「なりすまし」については、文学作品だけではなく、映画等の大衆文化にも目配りしたスーザン・グーバー『レイスチェンジズ』（1997）が代表的なものとされた。また、東洋人と白人との間の同様の関係についても、たとえば羽田美智子『ジャポニズム小説の世

界—アメリカ編—』(2005)、村上由見子『イエローフェイス』(1993)、宇沢(富島)美子『ハシムラ東郷—イエローフェイスのアメリカ異人伝』(東京大学出版会、2008)など日本での研究が盛んであった。女性による男性へのなりすまし、男性の女性へのなりすましについても、外見的な女装、男装はもとより、性自認、性同一性障害といった、外科的な変化も含めたさまざまなケースについての文献がすでに相当の蓄積があり、特に女性による男装、ジェンダー越境については個別の文学作品や画像、映像による表象などもふくめると相当の研究業績があり、特に文学上のジェンダー越境について論じたサンドラ・ギルバート&スーザン・グーバー『セックスチェンジズ』(1989)等が先行研究として重要であった。

筆者は 以来、合衆国文化における黒人、アジア系、先住民族等のいわゆる少数民族に属する女性によるアイデンティティの問題としてジェンダーと人種の関係がどのように表象されているかという問題について、特に近年は、彼女たちの語りの戦略としての「母親の言説」について研究し、2007年に単著『アメリカ・マイノリティ女性文学と母性—キングストン、モリスン、シルコウ』(彩流社)として一定の成果を見た。「母親の言説」に注目したのは、人種や時代を超えて普遍的なものと思われがちな「母親」というアイデンティティにとって、人種や文化の相違がきわめて重要な役割を果たしていること、またさまざまな民族集団に属する作家たちが、時には普遍的な「母親」イメージを、また時にはそれぞれの文化に固有な女性、母親、あるいは女神のイメージを利用しつつ、「語る母親」を作り上げているという、さまざまな文化の普遍性と固有性の中での創造の過程を分析するためであったが、この研究の過程で、人種や文化の相違がもっともあからさまな形で表象されるのが、違う人種になりすます、というプロットであることに気づいた。そしてまた同時に、違う人種になりすますということの持つ意味が、当然のことながらどの人種からどの人種へなりすますのか、という方向性によって大きく異なること、また「なりすまし」の意味が、なりすます人物が男か女かによっても大きく異なることに興味を持つにいたった。「なりすまし」という現象をより大きくとらえると、そこには性転換や異性装といった、ジェンダー越境も含まれるわけであるが、人種とジェンダーの「なりすまし」についてその両方を関連させた形で論じている研究は意外にも少ないということにも気づいた。

2. 研究の目的

人種、民族、国家、階級、そしてジェンダーなど、個のアイデンティティの問題には様々な要素が複雑にからみ、そして個人の生涯を通じてそれらの要素が不変であるという保障もない、という認識が共有されはじめて久しい。また、それらの要素は、自発的であれ、不本意であれ、変化を生じた場合に、実は生来的なものでも自然なものでもない、ということが確認されるということも多いのである。

そのような要素の中で、とくに人種とジェンダーは、生来的で生物学的なものであり、それらのアイデンティティにさらに多くの生来的な特徴が付随するものとされてきた。白人に比べて黒人がより理論的でなく情緒的、あるいは暴力的であるとか、白人に比べて東洋人は器用だが独創性に欠けるとか、男性にくらべて女性がより感情的で繊細、平和的である、というような考え方がその例である。本研究は、文化的に構築されたそのようなアイデンティティ構成要素の中で、特に人種とジェンダーに的を絞り、意図的にあるいは強制的に、越境する人物を、主にアメリカ合衆国の近・現代の文学作品の中にたどり、そこに表出される、その時代の人種観、ジェンダー観、それらが相互に複雑にからみあい、影響しあう状況、そして、「越境する人物」を主人公にする文学作品という形式を通じて、そのような人種観、ジェンダー観がどのように表象、複製再生産、あるいは批判されているかを検証することを目的とした。より具体的には、アメリカ合衆国のマイノリティ女性による文学作品に特に注目し、その中で、ジェンダー、人種に的を絞り別個のものとして論じられがちな、それらのアイデンティティ越境について、人種横断的に検証すること、また人種とジェンダーのアイデンティティ越境を別個のものとするのではなく、その二つの要素が相互に関連しているという仮定にたって、相互関係を検証すること、の二点を目的とした。

アメリカ文学研究という分野において、アイデンティティ越境は人種、ジェンダーいずれにしる、テーマとして扱われてきたが、その扱い方は往々にして、いわば「社会的」なアプローチであった。つまり、文学作品を社会的資料として読み、社会現象としてのアイデンティティ越境について論じる、というものが多く、アイデンティティという文学上の大きな問題を考える手がかりとして、文学作品におけるアイデンティティ越境を扱うといったアプローチはグーバー、富島など、比較的近年になって行われるようになった。本研究は、そのように文学研究のひとつのやりかたとしてアイデンティティ越境の問題を扱うという方向性を継承しつつ、ジェンダーと人種という二種類の越境を相互に関連

し、影響しあい、あるいは矛盾しあうものとして総合的にとらえようとするものであった。さらに、複数の人種あるいは民族集団を同時に考察し、その特徴を比較検討することにより、アメリカ合衆国文化というより大きな枠組みの一部として（あるいはその枠組みを超えるものとして）、アイデンティティ越境をとらえようとする、鳥瞰図的な視点の獲得も研究の過程で得ようとした。また本研究で扱う少数民族の女性作家たちは、モリソンなどごく少数を除き、アメリカ合衆国ではよく知られていても日本では知名度が低く紹介もほとんどされていないことから、テーマ的なアプローチによる本研究が、日本において彼女たちの作品にあらたな関心を集め、アメリカ文学研究、ひいてはアメリカ文化理解促進にひとつの有効な刺激となることも目標の必然的な一部であった。

3. 研究の方法

まず人種、ジェンダー越境についての一次資料についての情報を集め、さらに研究上最新の知見を得るため、MLA International Bibliography, ProQuest 等のデータベースを用いて、人種越境、ジェンダー越境について参考文献表を作成し、参考文献表に従って文献を収集、内容の読解、まとめを行った。また同じデータベースを主に用いて、このアメリカマイノリティ女性作家の作品でアイデンティティ越境について扱ったものの具体的な研究に関する文献表を作成した。検索のキーワードとしては「パッシング」「ブラックフェイス」「ジェンダー越境」「人種越境」等を用いた。

これらによって収集した文献を読解、分析して研究を進め、その中で特に重要と思われたマキシーン・ホン・キングストンとデインジー・セナについて、さらに文献の収集を上記と同じデータベースを利用することによって収集し、それぞれについての考察をまとめ、研究発表を行なった（5の主な発表論文等、および各年度の成果表を参照）。口頭による研究発表に際する会場での質疑応答を含むフィードバック、および日本、米国の研究者との意見交換やレビューを通じて発表の内容に加筆訂正を加え、いくつかの報告書、論文の形にまとめることができた。（以下4、5を参照）。

4. 研究成果

本研究は、従来から研究してきたアメリカ合衆国の少数民族に属する女性についての研究であると同時に、アイデンティティというきわめてアメリカ的なテーマについての研究でもあった。少数民族でありしかも女性

というマイノリティの中のマイノリティのようだが、さまざまに分解され、分類された自己のあり方が、実は多様の中の統一を国是とするアメリカ合衆国を代表する性質があるものであるという仮説が本研究である程度証明された。固定化されたアイデンティティという概念そのものを否定すると同時に逆説的に肯定してしまうパッシングという行為も、やはり多くの点できわめてアメリカ的なものであることも、改めて理解された。

さらに研究を進めるうちに、中国系アメリカ人マキシーン・ホン・キングストンの著作には、性の境界を侵犯する人物が多数登場するが、その侵犯の中から浮びあがるのは、ジェンダー化された暴力と平和の問題でもある。女性は生来的に平和的、男性は生来的に暴力的であるという二項対立が否定されて久しいが、暴力的な行為者としての女性がジェンダー越境的な人物として描かれてきたこと、女性は生来的にではなくとも、歴史的、文化的に反戦・平和を希求するという傾向などもふくめ、ジェンダーと暴力／平和の問題が、パッシングの考察を経て、アイデンティティ越境の問題と絡め、さらに深められるべきテーマであるという確信を得た。キングストンは自ら「平和主義者」と名乗る数少ないアメリカ知識人の一人であり、最近作『第五の平和の書』のみならず、長編第一作『チャイナタウンの女武者』以来、越境というプロットを効果的に用いながら平和とジェンダーの問題を扱っていることについて、比較的丁寧に論じることができたことが、今回の研究の成果の一つであった。

また現象としては過去の遺物と考えられがちなパッシングが、黒人大統領を擁する現在のアメリカ合衆国で、いまだに有効な概念として生き延びているとしたらそれはどのようにしてか——今日の視点からパッシングを考える上で、何人かの現代黒人作家の重要性が新たに見出された。特に、90年代以降に活躍しはじめたデインジー・セナや、コルソン・ホワイトヘッドら新しい世代の黒人作家が、新たな視点からパッシングの問題を扱っていることが確認された。「パッシング」については黒人文学研究という枠組みの中の小さなテーマとして扱われることが従来多かったが、ここ10年余り、合衆国では様々な研究が行われ、その内容を概観しつつ、セナを含むそれらの作家を研究し、論文にまとめることができたことは特筆すべき成果であった。さらにその中で、そもそも、先祖とのしがらみを捨て、新天地で新たなアイデンティティを獲得し人生をやり直す、というパッシングの行為が「アメリカ人」という概念そのものと重なるという発見があった。つまり、ケネス・M. プライスが『ウォルト・ホイットマンへ、アメリカ』（2006）で

示唆するように、人種アイデンティティの越境こそ、「多様の中の統一」の象徴として、アメリカ人になるためのいわば通過儀礼的な意味を持つとすら言えるのである。しかし、セナの『コーケイジア』で、主人公が「人種アイデンティティなど存在しない」と論じる父親に対して、それは机上の空論である、と激しく反発するように、全てのアイデンティティが「なりすまし」である、と結論づけるのも安易な一般化であり避けなければならない。つまり、この問題はアメリカ研究の重要なテーマ「アメリカ人というアイデンティティ」の根幹をなすものとしてさらに追及すべき課題であるという確信を得た。(以上についての具体的な発表成果については各年の成果表および以下の5を参照。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 杉山直子、Usable Past, Unspeakable Secret: Maxine Hong Kingston's Use of Woman Warrior Characters、**大国論集** (北海道大学スラブ研究センター) 夏期国際シンポジウム「ユーラシア諸国におけるアジアの自己表象」プロシーディングス)、2011年、査読無、印刷中
- ② 杉山直子、私のように黒い姉妹たち：デインジー・セナの『コーケイジア』と「パッシング」、査読無、日本女子大学人間社会学部紀要21号、2011年、印刷中
- ③ 杉山直子 From the Woman Warrior to Veterans of Peace: Maxine Hong Kingston's Pacifist Textual Strategies、**アメリカ学会英文ジャーナル**、査読有、Vol.20, 2009年、131-147.
- ④ 杉山直子 日本女子大学人間社会学部文化学科/国文学研究資料館文学形成研究系「古典形成の基盤としての中世資料の研究」プロジェクト シンポジウム「ジェンダーと古典キャラクター」報告書、査読無、2009年、60-66.

[学会発表] (計3件)

- ① 杉山直子、Usable Past, Unspeakable Secret: Maxine Hong Kingston's Use of Woman Warrior Characters、【北海道大学スラブ研究センター】夏期国際シンポジウム「ユーラシア諸国におけるアジアの自己表象」、2010年7月9日、北海道大学スラブ研究センター
- ② 杉山直子 「パッシング」する子供たち、2010年度日本女性学会、2010年6月10日、大阪府ドーンセンター
- ③ 杉山直子、チャイナタウンの女武者：キ

ャラクターとしての花木蘭の変容、シンポジウム「ジェンダーと古典キャラクター」2008年11月15日、日本女子大学西生田キャンパス

[図書] (計1件)

- ① 杉山直子 (共著)、アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために、世界思想社、2011年、印刷中

[その他]

ホームページ等

<http://naokos.blog.ocn.ne.jp/blog/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉山 直子 (SUGIYAMA NAKO)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：20213506

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし